

## 防災まちづくりアートに関する実践的研究

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2019-07-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 森脇, 環帆<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10291/20254">http://hdl.handle.net/10291/20254</a>                       |

# 2018年度 理工学研究科

## 博士学位請求論文（要旨）

### 防災まちづくりアートに関する実践的研究

学位請求者 新領域創造専攻  
森脇 環帆

#### 1 問題意識と目的

東日本大震災の経験を踏まえて改正された災害対策基本法は、住民による災害教訓の伝承や各防災機関における防災教育を努力義務化した。さらに、住民等の円滑かつ安全な避難の確保のため、避難指示等の具体性と迅速性の確保、防災マップの作成を明記したほか、平素からの防災の取り組みの強化を図るため、民間事業者や住民など各主体の役割を明確化した。しかしながら、その後の広島土砂災害や西日本豪雨では適切な避難対策が講じられず、防災対策の自助と共助の促進が重要かつ喫緊の課題になっている。

こうした状況下、地域の活性化や教育などで様々な分野のまちづくりにアートを活用したまちづくりの取り組みが広く普及している。これらのまちづくりは、アートプロジェクトや地域芸術祭と総称され、その経済波及効果や地域メディア、教育等の効果が多数報告されているが、防災にアートを導入した事例は少なく、学術的な蓄積は乏しい状況にある。

一方、ワークショップの手法を防災まちづくりや防災教育に導入した事例は数多くあり、両者の連携による効果やリスクコミュニケーションの効果が明らかにされている。しかし、参加者が限定的で、その成果の周知や活用だけでなく、参加者の拡大や教育効果の持続も課題になっている。そのため、ゲームの要素を用いた防災ソフトウェアや地域の歴史災害を題材にした防災教育のプログラムや教材が開発・評価されてきたが、これらはワークショップのプログラムではないし、アートを導入した開発・評価でもない。

そこで、本研究は、防災まちづくりにアートを導入した防災まちづくりアートの普及を提唱し、東日本大震災の経験と教訓を踏まえた自助と共助の取り組みの裾野を広げ、リスクコミュニケーションを促進する防災まちづくりアートのプログラムを開発するとともに、その評価・改善を繰り返す実践的研究を通して、防災まちづくりアートの概念と手法、並びにその持続的展開の要件を明らかにすることを目的とする。

#### 2 構成及び各章の要約

本論文は、次の6つの章から構成されている。

第1章 序論

第2章 防災まちづくりアートの概念と手法の整理

第3章 防災まちづくりアート・プログラムの開発とその評価

第4章 防災まちづくりアートによるリスクコミュニケーション

第5章 防災まちづくりアートのアート性と持続的展開に関する考察

第6章 結論と課題

第1章「序論」では、本研究の背景と目的、方法を論じた上で、先行研究を踏まえ、本研究における防災とまちづくりとアートの定義、並びに研究の意義を明らかにしている。すなわち、防災は、「自然災害の被害を最小限にとどめるための事前の取り組みの総称」、まちづくりは、「多様な主体が協働し、まちの課題解決をめざしてハードとソフトの両面から改善を図ろうとする継続的な取り組みの総称」、アートは、「表現者あ

るいは表現物と鑑賞者の相互作用により精神的・感覚的な変動を得ようとするアーティストによる取り組みの総称」と定義し、その三者が重なる領域を防災まちづくりアートとして設定した。そして、本研究は、防災まちづくりが抱える課題と向き合うアート・プログラムを開発し、防災まちづくりとアートを結びつける取り組みの概念と手法の設定と検証を通して、防災まちづくりの持続性とアートの特質について議論を促進する点において意義があることを示している。

第2章「防災まちづくりアートの概念と手法の整理」では、防災とまちづくりとアートがそれぞれ重なる3つの領域に分解し、先行研究や先行事例の分析を通して、防災まちづくりに楽しみを加えることで活動を持続・促進する効果とその手法、リスクコミュニケーションを促進するワークショップの手法とその効果測定の方法を整理した。また、純粹芸術至上であったアートがまちづくりのニーズに呼応してプロジェクト性を導入したことで、アートに対する価値観の変容につながり、新しい祭の創出が地域活性化に効果的である一方、そのプロジェクト性がアーティストの自由な表現を封じる等のアートの特質に関する課題を提示した。また、大震災の直後に、破壊や悲しみ、鎮魂等を表現した「災害アート」活動が現れ、その後災害の記憶を他者に伝えることを通して防災につながるプロジェクト性を持つ「防災アート」という新たな分野の胎動を明らかにした。

以上から、防災まちづくりアートの概念は、災害の記憶を継承し、イメージを喚起するアートであり、作品制作のプロセスを重視して防災まちづくりを持続・促進するアートであると設定した。それを具体化する手法として、①防災課題を視覚化して地域を知る、②感覚的な変動を得るようにする、③まちで遊ぶ地域の新しい「祭り」にする、④ワークショップの手法を活用する、⑤リスクコミュニケーションを促進する、⑥プロジェクト性を明確にする、の6つを設定した。

第3章「防災まちづくりアート・プログラムの開発とその評価」では、津波からの逃げ地図づくりワークショップを補完するために開発した「キツネを探せ！」という防災まちづくりアート・プログラムは、高台への避難行動の体験や災害履歴を含む地域の歴史文化の伝承を促進するために、「まちで遊ぶ」「地域を知る」「感覚的な変動を得る」をアート表現の3本柱としたことを明らかにした。このうち「まちで遊ぶ」と「地域を知る」は、作成した逃げ地図や地元関係者のヒアリングから表現対象の要素を抽出し、「感覚的な変動を得る」は、被災の記憶が新しい岩手県陸前高田市では災害に対する恐怖を軽減しつつ、未災地の静岡県下田市では災害のリスク特性に関する感覚的な理解を促すプログラムにした。その結果、当該プログラムが災害時の心構えに寄与する可能性や防災に対する関心を高める効果が見られ、プログラムを通して地域をよく知ることの意義が認められたことを明らかにした。他方、当該プログラムだけでは、自分から行動を起こす、又は具体的なリスクコミュニケーションを促すまでには至らなかったものの、防災への関心が低い人へのアプローチとして有効である点を生かし、逃げ地図づくりプログラムと適切に組み合わせることを今後の課題として示した。

第4章「防災まちづくりアートによるリスクコミュニケーション」では、前章で明らかにしたアート・プログラムの成果と課題を踏まえ、リスクコミュニケーションの促進に留意して和歌山県太地町で新たなプログラムを試行し、それをもとに下田市立朝日小学校において開発・実践したプログラムの設計手法と実施内容、並びにその評価を明らかにした。すなわち、新たに開発したプログラムは、災害リスクのイメージの喚起と児童の自己有用感の向上を図るため、避難困難者に扮したPTA協力者と遭遇するクロスロードゲームの要素を組み込んだ。プログラムの開発・実施にあたっては、学校関係者と協働し、プログラム終了後に避難困難者の対応に関する経験者の講話を行い、自助と共助のあり方について考えを深める機会を提供した。

この新たに開発したアート・プログラムの参加児童の意識変化を測定したところ、当該プログラムが明らかに児童の自己有用感の向上とリスクコミュニケーションの促進に繋がる効果が認められ、関係者インタビューからは、児童に避難困難者の対応に関する葛藤を起こさせない状況を用意するのが、地域住民の役割であ

ることを明らかにし、当該プログラムが揺さぶりをかけた自助と共助をめぐる葛藤は、プログラムをイベントだけに止めてはならないことを示唆していることを示した。また、逃げ地図づくりワークショップと適切に組み合わせることで相乗効果が期待できることを明示した。

第5章「防災まちづくりアートのアート性と持続的展開に関する考察」では、防災まちづくりにアートを導入してきた先進地域の墨田区向島において、長年持続している「イザ！カエルキャラバン！in 寺島」という防災プログラムとアーティストが住みながら制作を行うことに関する考察を通して、防災まちづくりアートのアート性と持続的に展開するための要件を考察した。前者は、アーティスト・藤浩志らが開発した防災イベントのプログラムを、向島では事前のワークショップにより独自のプログラムを作成してローカライズした結果、防災活動の裾野が広がり、持続していることを明らかにした。同プログラムは、第2章で示した防災まちづくりアートの概念と手法と重なる部分が多いが、クリエイティブとはいえアーティストの手から離れており、そのアート性をめぐって議論があることも明らかにした。一方、後者については、アーティストが住民として地域の防災課題に気づき、その課題を新たに見直す視点を提供する点において防災まちづくりアートのアート性があること、複数の向島のアーティストが自主的に住みながら制作を行っている現状から、アーティストが建築・まちづくりの専門家と協働できる、地域における関係性が防災まちづくりアートの持続的展開を可能にしていることを明らかにした。

第6章「結論と課題」では、各章を要約し、本研究の結論と今後の課題をまとめ、防災まちづくりアートを普及促進する上での視点を整理している。本研究では、防災とまちづくりとアートが重なる領域に関する先行研究と先行事例から防災まちづくりアートの概念と手法を設定し、それを踏まえて津波からの避難に関する逃げ地図ワークショップを補完するアート・プログラムを開発した。その実践と評価を通して、アートの導入効果を具体的に明らかにするとともに、防災まちづくりアートの概念と手法を検証した。すなわち、防災まちづくりアートは、その楽しさから参加の意欲や地域への関心を高めるだけでなく、自助と共助を考えるリスクコミュニケーションの好機を生み出すことができ、既存の防災まちづくりに刺激を与えて持続的に展開できる可能性を明らかにした。また、防災まちづくりアートのアート性と持続性を問い直し、アーティストの手を離れると、アート・プログラムはローカライズし、そのアート性は希釈せざるをえないことから、本研究で提唱する防災まちづくりアート・プログラムは、他者に対する防災意識を持つことが特徴であり、災害対策として問われる内容は厳しいため、アーティストが個として地域住民に向き合い、アーティストの思想が届く範囲で行うことが重要であるとした。つまり、一つのプログラムを広く普及させるよりも、複数のアーティストが参入することでプログラム数を増やし、アーティストとまちづくり専門家と地域住民の区別を明確にすることで相互が協力し、点から面へと変化させていくことが、防災まちづくりアートの持続性、または芸術における新たな分野の確立につながると考えられることを明示し、今後の課題として論点を示した。